

ブルー・アイランド氏がやりたかったこと

第10回

女性文化の担い手

幼稚園を卒業する時の文集に……字の勉強の心算もあつたのだらう、「大きくなったら何になりたいか」を書けと言われて、「女の人になりたい」と書いたら、担任の阿部先生が「男の人は女の人にはなれないの、あなたはピアノが弾けるんだから、ピアノの先生になりたいって書きなさい」と言われた。思えばこれが、我が生涯初めての校閲であった。

別に性同一性障害があつたわけではないが、真相は次のようである。生まれつき歩くのに問題があり、2回の手術を受けた小学2年生までは、外遊びができなかった。そこで祖母、同居していた叔母から当時の女性文化を教えられた。オルガン(のちにピアノ)、少女雑誌(少女クラブ、それいゆ)、お絵描き、手芸、活け花などである。父は苦々しく思ったに違いないが、劇場勤めでほとんど家に居なかったから、阻止するのは難しかった。そこに生後すくなくなくなった姉(ロミオ)の着るはずだった服を着せられた。叔母が化粧までしてくれたのだから恐れ入る。もちろん、その後は女装には全く興味はないが、描く人物に装身具を纏わせたりするのは好きである。旅先で見つけた一点物の指輪を、なんの気なしに世話を焼いてくれた女性に贈ったら、甚だしい勘違いをされました。

しかし、幼年期には人間の性は成人したら決まるものだらうと思っていたことは事実である。後に萩尾望都の「11人いるー」で、宇宙人にはそういう種族も居ると書かれていたり、大島弓子の「綿の国屋」で、チビ猫が将来、人間になれると信じているのも、同じ発想だったので嬉しくなった。何故なら幼稚園では男女の別は厳然としてあり、使っているものの色まで決まっていたのだ(男は青や緑)。チューリップを描くのに桃色を使ったら笑われたくらいである。また語尾に「よ」「ね」を付けたら、「一人称を「私」というのも憚られたのだ。だが一方で、そういう女性文化と呼ばれた

ている活動を牽引してこられたのは男性であることにも気づいていて、消極的ながらも職業の1つとして考えていた。それを励ましてくれたのが最初は祖母であり、次に小学校の音楽・図工の教師だったのである。そして幸運なことに20世紀末から、性差はなくなり始めたような気がする。そしてあつてもなお、我が心の中には、永遠の男性への希求があり、極めて複雑な心理状態を呈している。となたか心理分析してはくたさらないものだろうか。

文と絵 青島広志

東京藝術大学講師。オペラや合唱など作曲した作品は200を超える。ピアニスト、指揮者としての活動も40年を超え、コンサートやイベントもプロデュース。「題名のない音楽会」「世界一受けたい授業」などに出演している。



写真提供: Gakken Pub

★お知らせ 「ブルー・アイランド氏がやりたかったこと」は今号をもちまして「よみカル」本誌では終了となります。多くの反響をお寄せいただきありがとうございます。引き続きよみうりカルチャーのホームページ <https://www.ync.ne.jp/> で、掲載となります。お楽しみに!